

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.78

試 行 錯 誤



パナニコムキャンプを離れ空港に向かう

特集 日本の難民受け入れを考える

日本の難民政策は冷たいか	2
日本の生活、何か困ったことがありますか	6
定住難民が抱える問題と傾向	9
コーディネーター一年生として	10
“難民たちとの出会い” — 活動報告書より	12
〈インタビュー〉日本は住みにくいけれど	14
誰もいない村	16
My Dear Friend	18
ボランティア登場	19

日本の難民政策は冷たいか

1月30日の朝日新聞に「難民受け入れ 口先だけでは駄目」という在日外国人からの投書（アサヒリビングニュースからの転載）が載った。内容は、日本はインドシナ難民を1万人受け入れるとっているが、定住手続きが難しく、事実上難民を閉め出しているというものだった。「日本の都合だけを考えて難民基準と、信じがたいほどやっかいな入国後の手続き——少なくとも8つの委員会や省庁の認可が

必要」と指摘している。

日本の難民受け入れに対する不満はこれまでもよく聞いている。しかし“8つの委員会や省庁の認可”とは初耳だった。いったいこれは何なのか。本誌でも何回か難民問題の特集を組んできたが、もう一度日本の難民政策を整理し、今何が求められているのか明らかにしたいと思う。

日本の難民政策は冷たいか

1万人枠とは何か

日本政府は1979年（昭54）にインドシナ難民の定住枠を500人に定め受け入れを開始した。その後80年1000人、81年3000人、83年5000人、85年1万人と少しずつその枠を広げてきている。今年1月末の統計によれば5454人が日本に定住している。数千から数万の難民を受け入れているアメリカ、カナダには遠く及ばないが、それでも毎年300～1000人の難民を受け入れており、この数字は西ドイツやイギリスよりも多い。（表①）しかし日本の定住枠にはいつまでという目標がなく、難民の受け入れに熱心ではないとの印象も与えている。

そもそも1万人枠とは何なのだろうか。多いのか少ないのか。日本の難民政策の窓口である法務省、外務省にその根拠と今後の見通しについて聞いてみることにした。

まず最初に訪れた法務省では「1万人枠にしたのは83年（昭58）に決めた5000人では少なすぎたからです。すでにこの年は2827人が定住しています。しかし日本を希望する難民はそれほど多くはない。1万人なら当分大丈夫でしょう」ということだった。その年に何人受け入れるのかについては、「該当する難民はいくらでも」との答だったが、果たしてそうだろうか。たしかに日本を定住先に決める難民は少ない。強力な民族社会があるアメリカやフランスの方が暮らしやすく、日本語の難しさがあるからだ。しかし次の例のように、日本の受け入れ基準の厳し

さもあると思われる。

UNHCRのケース

“日本は難民問題に冷たい”というのは、難民問題がクローズアップされて以来言われ続けてきた言葉だ。マレーシアのUNHCRの職員が日本の調査団が持ち帰った2つのケースについて語ってくれた。

<ケース1>

6歳の姪を連れた21歳と16歳の兄妹は彼らの姉妹のいる日本に定住を希望していた。1年以上待たされたあげく、その答は16歳の妹のみ受け入れるというものだった。6歳の姪は彼女にとてなついていて、姪や兄と離れて暮らすことはできないと、彼女は日本に定住するのをあきらめたという。

難民は近い親族のいる国に定住するのが望ましく、この場合は家族再会（Family Reunion）のケースだったが、日本政府のやり方は再び家族を分離するものだった。

この件に関し法務省の難民認定室では、「日本の態度が特に冷たいものだったとは思いません。どこの国と比較して言っているのですか。アメリカだってこの場合は拒否しますよ。カナダなら受け入れるかもしれませんが。新聞にも最近のボートピープルは経済難民ではないかといわれてるぐらいです」と述べている。彼らは経済難民と判断されたいらしい。

<ケース2>

ベトナム戦争で失明し、手足が不自由になった南

ベトナムの兵士が日本で治療を受けていたところ、1975年の政変で帰国できなくなり難民となった。その人の息子が日本に定住の申請を出し続けていたが認められなかった。父親が生活保護を受けていたからである。2年後、彼が15歳になったのでやっと定住許可が降りた。15歳になれば働けるからだ。

このケースの場合はUNHCR職員のねばり勝ちといえる。「ねばり強くアピールすれば聞いてくれることもあると痛感しました」。とかく日本の受け入れは評判が悪く、「今回は調査団よりも多くの難民をとるのかい」という冗談が聞かれるほどだという。「日本政府は世界が何を見ているのかを知る必要があると思います。どこの国の受け入れ体制にもいい所と悪い所があります。ヨーロッパの場合、日本以上に厳しい面もありますが、いざという時に人道的な配慮を示してくれます。8年間もキャンプにいた人をフランスはとってくれました」と、杓子定規な日本の受け入れを批判した。

しかしこのケースに関しても法務省としては、「われわれの法律の枠内で受け入れを決めている。ポリシーに沿っているのをそれを越えることはできない」と、あくまでも基準は曲げられないという姿勢を示している。

また、「あなたは日本でどれだけの人が生活保護を受けているか知っていますか。自国民の社会保障さえ十分でないのです。たしかにあなた方のようなボランティア団体の意見もありますが、日本はアメリカやオーストラリアのように移民で成り立った国

とは国情が違うのです」と日本の独自性を強調した。最後に、日本が受け入れないから難民の定住が少ないのか。難民の希望が少ないから受け入れも少ないのかと質問してみた。答えはノーコメントだった。

日本は宣伝ベタ

次に訪れた外務省でも1万人枠の根拠について聞いてみた。「昭和54年以来難民を受け入れてきましたが、混乱もなく対応してきました。関係者も自信を持ってきましたし、国内の収容能力（国際救援センター、大和定住促進センター、姫路定住促進センターで合計1000人を収容できる）も大丈夫だろうということで、1万人にしました。それに、対外的にも日本のヒューマンイズムをアピールしなければなりませんから」「毎年の受け入れ数は前年並みということにしています。コンスタントにとることが大事だと思います」という答だった。外務省としてはよくやっていると自認しているので、日本の難民政策は冷たいという評判は心外のようであった。

「そもそも、日本社会自体が自分たちと違う者を排除する社会で、本当の意味で外国人受け入れの経験がありません。しかし、それと“冷たい”というのは違います。たとえばフランスなどは受け入れ自体はやかましくないのですが、あとは野ばなしです。日本はまじめで、“やるからにはきちんと”という意識がある。オーストラリアやカナダでは難民の失業者が多いですが、日本にはほとんどいません。受け入れの少ないことばかり言われ、そのようなことはあまり知られていません。宣伝ベタなのです」と外務省は日本の努力が知られていないことを残念がる。そして関係省庁に関しても、国際協力を強調し難民受け入れに理解を示してくれるよう訴えているということであった。

日本に定住するまで

日本に定住するには、ボートピープルで日本に上陸し、一時滞在施設を経て定住していく場合とアジア諸国の難民キャンプに滞在し、さらに日本に定住する場合と大きく分けて2とおりある。（次ページの定住許可条件参照）

定住の条件としてはやはり健康が第一で、家族全員の健康が求められる。障害者や心臓病のある人は認められない。次に②のイに示すように家族の生計を誰がたてるのかが考慮される。その人の学歴、職歴、技術等が検討され、日本で生活を営めるかどうか

表① 各国・地域別定住受入れ数推移

UNHCR資料による
1987年12月末現在

受 入 国	1975～83	1984	1985	1986	1987	計
1 米 国	524,137	47,661	40,561	33,011	35,721	673,542
2 カ ナ ダ	89,777	5,812	6,059	5,771	5,598	113,017
3 オーストラリア	84,079	8,554	6,447	5,624	6,589	111,293
4 フ ラ ン ス	93,218	3,957	1,527	5,291	2,340	106,333
5 西 独	22,387	88	230	345	140	23,190
6 英 国	16,388	174	104	550	251	17,467
7 香 港	9,610	19	49	70	48	9,796
8 ス イ ス	7,785	43	83	144	62	8,117
9 ニュー・ジラード	5,374	565	562	555	829	7,885
10 オ ラ ン ダ	5,465	164	206	210	337	6,382
11 ノールウェー	4,084	597	322	273	435	5,711
12 日 本	2,792	1,037	636	346	758	5,569
13 ベ ル ギ ー	4,180	72	79	40	107	4,478
14 デンマーク	3,141	134	96	230	94	3,695
15 イ タ リ ア	3,013	3	2	46	210	3,243
16 スウェーデン	2,785	68	65	115	8	3,072
17 中 国	2,853	—	—	20	0	2,873
そ の 他	10,899	201	1,280	135	182	12,697
計	891,967	69,149	58,308	52,776	46,160	1,118,360

定住許可条件

1. 難民の定住枠：1万人
2. 難民の定住許可条件
 - (1) 本邦に一時滞在しているインドシナ難民
 - ア 日本人の配偶者、親若しくは子又は日本人若しくは日本に適法に在留する外国人の親族で相互扶助が可能と認められるもの(養子を含む。)
 - イ 長期にわたり保護者となるにふさわしい善意の者であると認められる里親のある者
 - ウ 健康であって、生活を営むに足りると認められる職に就く者及びその配偶者、親又は子
 - (2) アジア諸国に一時滞在しているインドシナ難民
 - ア 日本人の配偶者、親若しくは子又は日本人若しくは日本に適法に在留する外国人の親族で相互扶助が可能と認められる者(養子を含む。)
 - イ 次のいずれかに該当する者であって、確実な呼寄せ人があるもの又は生活を営むに足りると認められる職に就くことが見込まれるもの及びその配偶者、親若しくは子又は同行するその他の親族で相互扶助が可能と認められるもの
 - ロ かつて、在外日本国公館又は在外の日本企業等に相当期間雇用されたことのある者
 - ハ かつて、留学生、研修生等として相当期間日本に適法に在留したことのある者
 - ニ かつて、日本人の個人的使用人として相当期間雇用されたことのある者
 - ホ かつて、日本政府若しくは日本政府機関の援助によって設立された技術研究機関等で日本人専門家から、又は青年海外協力隊員から、相当期間日本語、職業上の技術、柔道等を学んだ者
 - ヘ 上記ロ、ハ及びニのほか、かつて日本人と共同して、又は日本人の直接の指揮、指導の下に相当期間働いた者
 - ヘ その他、日本語の会話能力がある等、日本社会への適応力があると認められる者
 - ウ 長期にわたり保護者となるにふさわしい善意の者であると認められる里親のある者

かが判断される。家族構成も重要な条件で大家族や独身男性は敬遠され、若夫婦と子供の家族、あるいは独身女性なら認められやすい。大家族では住居を探すのも困難で、独身男性ばかり増えるのは社会が不安定になると判断するからだ。このようなことが「日本の都合だけを考えた難民基準」といわれるのかもしれない。

また(2)の各条件では日本との関連を求めているが、実際に日本の会社で働いていた者、かつての留学生などの中には日本以外の国を希望する者も多く、これはこれで考えさせられる問題である。

日本政府は毎年7～8回面接調査団を送り、日本定住を希望する難民がその条件に合うかどうかを検討する。今年の2月から3月にかけては、第20次の3班がタイ、マレーシアの各キャンプで調査を行っている。調査団の構成は法務省、外務省、アジア福祉教育財団難民事業本部のメンバーを中心に、その時々で内閣、厚生省、文部省、労働省から参加する。

日本には難民を専門に取扱う部局はなく、総理府にあるインドシナ難民連絡調整事務局が関係省庁(14省庁が参加)の調整を行っている。毎月1回開かれる会議で問題点が話し合われ、難民対策の基本方針はここで決められる。実務に関しては難民事業本部

が委託され、面接調査のコーディネートもここで行う。「8つの委員会と省庁」とはこれらの関係省庁のことを指しているのだろうか。民間との連絡については、ポートピープルの一時滞在民間施設、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)、各センター、法務省で構成される施設関係連絡会と難民救援を行っている10団体(UNHCR、外務省がオブザーバーとして参加)が構成する難民救援連絡会があるが、どちらも現状報告と実務連絡にとどまっている。

難民関連予算について

昨年の日本の難民定住及び一時庇護の関連予算は15億5700万円だった。(この予算はほぼ毎年同じ)これ以外に日本政府はインドシナ難民救済援助資金として、86年にはUNHCR、WFP(世界食糧計画)、国際赤十字、UNBRO(国連国境援助機関——タイ・カンブチア国境で活動/WFPに4928万USドル(103億円)を拠出している。またインドシナ難民もふくめ、UNHCRに5595万USドルを出しており、これはUNHCRのこの年の総予算の13.3%に当たる。これだけのお金を使いながら日本の難民政策が批判されるのは、どこかに“お金を出せば”という気持があるからではないだろうか。そして“やっかいなことは避けたい”“もうけにならないことはやりたくない”というホンネがあるように思われる。

定住難民の就職先は日本人の労働者が集まらない中小企業がほとんどである。アジアに進出している大企業は定住難民をとりたがらない。UNHCRや難民事業本部でも“お願い”しているが反応はないという。外務省も『「大企業ももっと難民を採用してほしい』という声は中小企業の人たちの間にあります。私たちとしても頼んでいます、日本の企業体制に合わないのか難しいですね』と、この件に関しては消極的だ。

また予算の使い方にしても、もう少し民間にまわしてくれないかと思うのだが、当分その見込みはない。定住難民やその他の難民のアフターケアをしているISS(日本国際社会事業団)は国際分担金が払えずあえいでいる。本部(ジュネーブ)から日本政府に援助してくれるよう頼んでみたがだめだったという。

行政の対応とサービス

“日本人並み”では不十分

日本に定住するインドシナ難民は閣議了解という

政策に委ねられた難民で、条約難民^(注)に準じた扱いを受けている。したがって彼らは日本人とほぼ同じ権

利を持っているが、“日本人並み”であることがかえって彼らにハンディを負わせていることがわかってきた。日本語が読めないばかりに、小学校の入学通知に気付かなかったり、予防接種の情報が届かなかったこともある。日本語のよくわからない人には日本人以上の配慮が必要なのだ。

法律扶助協会においても、「難民を日本人社会の既存ルールにあてはまることに問題があるのではないか」と指摘している。また「ボランティアには限界があり、行政が積極的に福祉担当の職員を置く必要がある。難民を受け入れたからにはちゃんと定住できるよう最後まで政府が責任を持つべきではないか」と、もう少しきめの細かい配慮を望む声もある。

秦野市の場合

このような状況をふまえ、地方自治体の中には定住難民に積極的な行政サービスを行う市が生まれてきている。神奈川県のアサヒ市では今年から40万円の予算をつけ、難民の日本語教育を実施するボランティア団体への助成を始める。

アサヒ市では昨年2月のカンブチア難民妻子殺害事件（ブイ・ムン事件）を契機として、市としても積極的に定住難民へのサービスに取り組むことに決めた。2月16日に市民生活課より出された「インドシナ難民に対する行政対応」には、その基本姿勢が示されている。

- (1) 国際文化都市として前向きに取り組む。
- (2) 日本国民と同等に基本的人権は保障されている。したがって精神的サービス事業を展開する。
- (3) 民間団体、地域ボランティアの活動にすべてをゆだねることには限界がある。

具体的施策としては(1)定住促進相談の実施——市民生活課相談事業の一環。(2)ボランティア団体への助成。(3)民生委員活動の促進。（すでに民生委員を通じ難民実態調査が行われた。その結果アサヒ市には64名のインドシナ難民が定住していることがわかる）(4)特別懇談会の実施。(5)難民間の互助組織化。(6)地域の国際化セミナー等の開催。(7)国等に対する要望——①定住促進センターに対する組織及び定住事業の充実・強化。②大企業に対する雇用促進指導。③市町村が行う難民対策事業への助成。の7項目が盛り込まれている。

アサヒ市にはすでに国際交流懇談会という民間団体があり、欧米人を招いて年2回のパーティなどを行

っていた。昨年5月ラオス人を役員に迎えてからは積極的に定住難民の人たちとも交流するようになった。2月28日には懇談会とボランティア有志が中心となって、東南アジアの人々とともに歩む会が結成され、新たに日本語、日本文化・習慣、及び数学や歴史などの教育を行うことになった。先生は民間ボランティアが引き受け、教材費は市が出す。このような活動が市民の間にもっと広まり、子供を連れてくる定住難民のための保育のボランティアなどが集まれば、と市の方では期待している。担当者としては「時間をかけてゆっくりと難民の人たちと信頼関係を作ってゆきたい。市民にも世界情勢に関心を持っていただき、国際理解を進めたいと思っている。そして難民の人たちの互助組織を育て、そのリーダーと市が連絡を取り合いながら問題の解決をはかりたい」と抱負を述べている。

さらにアサヒ市では、幼稚園・小学校の個別説明会（日本人と一緒にでは理解できないため）を計画するなど具体的な方策を考えている。

このようなアサヒ市の取り組みは周辺地区でも反響を呼び、ボランティアグループがアサヒ市を訪れ話を聞くなど、同市のやり方を学んでいる。

インドシナ難民が日本に定住し、もう9年になろうとしている。これまでは政府が主導し、民間がおぎなうという形でやってきた。しかしそれではすまなくなってきた。定住難民がお客さんとしてではなく、一人の市民として日本社会で生きていくためには、きめ細やかな行政サービスが必要だ。私たちは“日本人と同等”という意味を考えなければならない。日本人と同じであることを押しつけることは彼らにハンディを負わし、自信を失わせていないだろうか。

私たちはまだまだ難民問題が身についていない。親切でしたことでも難民の人には迷惑なこともある。私たち自身も検証しながら国や自治体の動きを見ていきたい。

先の新聞の投書が訴えたもの。それは杓子定規な日本の受け入れ体制への批判であった。いたるところで人道主義と、社会的・経済的な負担を少しでも軽くしようとする行政の方針がせめぎあっている。難民を古くから入れている国に学びながら日本の難民政策を整えていかなければならない。それは政府ばかりでなく、私たち自身の責任でもある。

（注）「難民の地位に関する条約」、及び「難民の地位に関する議定書」の適用を受ける難民。

日本の生活、何か困ったことがありますか。

温暖な気候、家族同士助け合いながらのんびり暮らしてきた人々が、突然緊張を強いられる日本社会にはおこたえられた。彼らは日本の生活にどんな不安、あるいは不満を抱いているのだろうか。日本に定住したインドシナ難民に、日本で生活して困ったこと、わからないことについて聞いてみた。たとえば子供たちの教育、進学について、医療費はどうしているか、住居の保証人のこと、また、将来を考える意味において年金には入っているか。とにかく今考えていることを、自由に語ってもらった。(編集部)

今の生活に精いっぱい

N.Cさん*カンプチア人*45歳*妻と子供4人

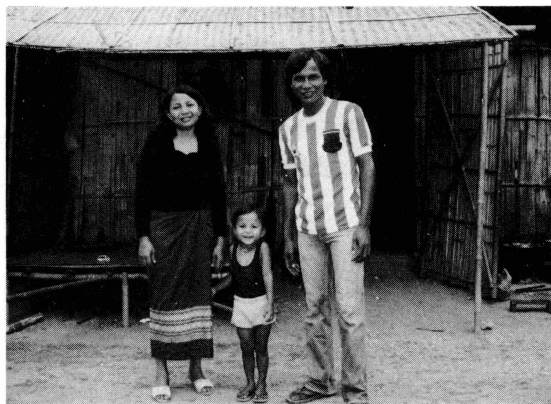
年のせいか最近仕事や生活に対する疲れがひどいです。日本に来たとき小学4年だった長女がもう中学2年になります。今は特に子供たちの教育が心配です。2年前に仕事が変わり住む所が移ってしまいましたから、子供たちも転校させました。前に通っていた塾も、経済的な理由で行かせてやれなくなりました。長女は、よく弟妹の勉強を教えています。

年金には会社で入っていますが、年金が将来に役立つのか深く考えたことはありません。それより身近に起こる色々な問題というか、目の前の事が先です。住居は雇用促進住宅なので安く、保証人は職安が会社へ取りもってくれました。会社は遠くなり、バスなどありませんので、自転車で1時間くらいかけて通っています。今はまだ今日の生活を保つことで精一杯です(N.Cさんは昨年過労のために倒れ、2カ月入院していた)

老後は子どもたちに

B.Sさん*ラオス人*37歳*妻と子供5人

日本に永住したいと思っています。今年国籍を取得するための申請をする予定です。書類などもそろえました。年金には入っています。でもラオスの家族は老いた親を子供がめんどろ見るのは当然ですから、年金をたよったりはしていません。娘が結婚し



日本定住が決まった

て離れても親のめんどろは見えだろろし、自分が老いるまでには、子供たちも働いて“家”のためにお金を稼ぐでしょうから。今は子供たちがいかに良い仕事につけるかの方が問題です。学校教育だけに頼っていますが、子供たちもそれぞれ頑張ってもらいしかありません。また長女がラオスにいたとき熱病にかかり、日本でも何度か入院しているので、その事が心配です。(B.Sさんは昨年その安定した生活ぶりを認められ、優秀定住者として国から表彰されている)

長男には大学まで行かせたい

Y.Cさん*中国系カンプチア人*妻と子供2人

ほんとうは子供が4人いますが、上の2人の娘は日本で結婚しました。定住して4年目に長女、6年目の去年に次女が、それぞれ同じ中国系のカンプチア人と結婚しました。今は中学3年の三女と長男の2人の子供と生活しています。2人とも今年は高校受験でしたがみごとに合格してくれました。日本に永住する決意です。

年金はこの4年くらいかけています。50代に入っていますから不安はありますが、子供たちがいますから。でも長男は大学まで行かせたいと思っています。(Y.Cさんは、ラオス、カンプチアを問わず中国系の定住者同士のネットワークがある)

できるだけ貯金をしたい

M.Kさん*カンブチア人*38歳*妻と子供1人

昨年の暮れに日本に来て、今月で2度目の給料をもらいました。(英語とクメール語の会話だった)

できるだけ使わないで貯金したいです。部屋の中のものほとんど貰った物です。2つの大きなイスは道に捨ててあったものです。(恥ずかしそうに笑う)今一番困ることは日本語とこの寒さです。でも来年はきっと寒さも日本語も大丈夫になっていると思います。

医療はまだ受けていません。住居の保証人は会社の社長さんで、年金は会社で入っていますが、とにかく税金を含め引かれるお金の多いのに驚きます。(M.Kさんは、まだ日本社会について自分なりの判断はできないという)

両親を寄りたいが

K.Jさん*ベトナム人*30歳*独身男性

22才の時ベトナムを船で難れました。あの時のことは今でもよく思い出します。漁船の取れた魚の中にもぐり込んで迎える船を待ちました。私の両親は私だけにお金を渡してベトナムに残りました。できたら両親を呼びたいと思います。今の問題は住居です。寮を追い出されることになりそうなので、アパートに入らなければならないんです。保証人は社長になってもらう予定です。年金は会社でかけていますが、それよりも、今の貯えの方が問題だと思っています。先に結婚などを考えてしまいますから。(K.Jさんはコンピュータ技術者という高い技術を必要とされる職場にいる)



初めての冬はこたえる

やりたいことを1つずつやる

K.Sさん*カンブチア人*32歳*妻と子供2人

去年自動車免許を取り車も買いました。(150万円)貯えは半分になりました。でも、やりたい事やれる事を一つ一つやるしかないと思っています。将

来を考えたらず転も一つの技術にしておきたいです。運転を忘れないために車を買いました。(彼の他の友人たちも、それぞれ車を持っている。仲間同士の競争のようなものでもあるが、車を買うことは、日本に定住して5、6年経つ人たちに見られる典型的な一つの行動のようだ)

家内は、内職をしています。子供は7歳と2歳で、長男は今年小学一年生です。年金は、2年前に変わった今の会社から入っていますが、あまり意識していません。

先のことはわからない

K.Cさん*カンブチア人*26歳*女性*子供1人

夫は難民キャンプにいた時病気で亡くなりました。日本に受け入れられ、3歳の娘と2人で日本へ来ました。日本での身寄りはいません。まだ職がなくセンターを出られません。早く仕事をしてお金を作らなければなりません。先のことについては何一つわかりません。(87年度に日本が受け入れたカンブチア人の内5ケースが未亡人)

日本語がうまく話せない

T.Kさん*ベトナム人*37歳*妻と子供2人

日本でとにかく一番困っているのが日本語。定住して6年も経つのにまだうまく話せません。娘は17歳で中学に通っています。今は大宮の雇用促進住宅に住んでいて、近所には同じベトナムの家族がいるので協力しています。年金は会社ですっとかけています。でも、できることならフランスへ行きたいです。すし、あまり意味はありません。

年金は意味がない

S.Cさん*カンブチア人*27歳*妻と子供2人と弟

弟は16歳で中学2年です。進学させてやりたいのでお金を作らなければなりません。私は難民は経済的にもやっぱり苦しい立場にいます。なぜなら定住したその時から家族全員を養わなければなりません。日本の若い人の様に結婚前に貯えがあったらもう少し楽だと思います。大きい病気や怪我があったら心配です。年金はかけていますが私にとっては意味がありません。私はカンブチアが平和になったら帰るつもりです。

日本で困ったのは、やっぱり日本語です。3カ月の学習ではあまりに短かすぎます。会社で問題が起きても言いたいことが言えないし、職場の人間関係

が離れてしまう。これはとても大きいことです。だから会社をやめてしまうのです。妻は子供の保育園からの大事な手紙を捨ててしまいます。だから日本人の子供と同じことをしてやれません。

住居が狭すぎる

D.Vさん*ラオス人*34歳*妻と子供2人と妹弟
私には妻と子供の他に25歳の弟と16歳の妹がいます。また近所に妻の母親もいるため、将来的には経済の負担は多くなるでしょうが、先の予定は立っていません。昨年8月に生まれた子供も含めて2間に4人の大人と2人の子供は狭すぎます。妹も自分の空間がほしいでしょう。雇用促進住宅で安いのですが住宅の問題が今は大きいです。年金は会社で入っていますが私は大切だと思っています。

障害を持つ娘が心配

S.Sさん*カンブチア人*35歳*妻と子供3人
先月は子供たちが全員はしかにかかり大騒ぎでした。病院は慣れている所だからいつもはあまり心配していません。ただ長女(12歳)は赤ちゃんの時右脳を高熱にやられ、左半身が不自由です。障害者手帳も受けました。昨年8月に手術も試みましたが効果はありませんでした。

年金はとても必要だと思っています。子供は3人とも娘だし、将来カンブチアに戻るつもりも無くなってしまうしました。先のことも考えれば問題ですが、今はあまり考える余裕がありません。生命保険の方をかけておきたいのですが高過ぎてダメです。



日本語を書くのが大変

G.Tさん*ベトナム人*32歳*妻と子供2人
3年前に定住しましたが、日本語がまだわかりません。病院はとにかく行けば何とかしてくれるし、英語が通じます。でも書かなければいけない時は困ります。保証人には安定所を通して社長さんになっ

てもらっています。年金は3年くらい入っていますが、良いかどうかの判断は難しいです。もっと日本語を勉強したいです。

年金は必要、生命保険にも入る

S.Pさん*カンブチア人*35歳*妻と子供2人
日本には永住するつもりです。定住して6年目。日本語はほとんど問題ありません。病院でもあまり困らないし妻も日本語は問題ないです。年金は当然必要なものですし、万が一の事故も考えて生命保険にも入っています。将来のためには在日カンブチア人はもっと協力し合う意識を高める必要があると思います。

まわりの日本人が助けてくれる

K.Sさん*カンブチア人*29歳*女性*子供1人
定住して4年目です。子供と2人暮して、私が仕事の間子供は保育園に行っています。苦しいことも多いですが、周りの日本人が助けてくれます。日本語はやっぱり難しいです。会社ではパート扱いなので年金には入っていません。必要かどうかはわかりません。

できれば再定住したい

N.Sさん*カンブチア人*28歳*夫と2人だけ
日本の生活条件がこんなに難しいとは思いませんでした。できればアメリカかフランスへ再定住したいです。日本は定住者の数も少なすぎるし、外国人と共同で暮らす意識が足りない様に思います。(今は大和センターの中にいる)

今回のインタビューは、様々な人を対象にしたが、核心的な答えは世帯主のものが多かった。また、遠慮深い人など性格も様々で、日本人に話したくないこともあったと思う。特に母子家庭の女性などはなるべく将来を考えない様に毎日を送っているようだった。年金の話などされると、自分の老後など普段考えもしないことを思案し、落ちこむ人もいた。考えてみれば日本人でも明確な老後のイメージを持っている人は少ないだろう。しかし日本人と違うのは、子供たちを信じ老後にそれほど不安を抱いていない夫婦が多いことだった。定住して年が経つほど、彼らの問題は私たちが今抱えている問題と変わらなくなっていくことを実感した。(落合正幸)

定住難民が抱える問題と傾向

難民相談員に聞く

日本がインドシナ難民を受け入れてから8年以上の年月が経ち、難民相談室に寄せられる問題はより多様化してきたといえる。寄せられる相談事では言葉の問題が依然として多いが、経済的な問題に関する相談、子供の進学、それに最近では結婚の悩みを訴える者も増えてきた。

このような状況をふまえ、カンボジアカルチャークラブ（CCC）と幼い難民を考える会（CYR）ではカンブチア人による電話相談を行っている。最近の相談のなかから特徴的なものをいくつかあげてみたい。

進学について

平均18歳で高校に入学するのが定住難民子弟の傾向である。最近では進学問題の相談が多い。12～13歳の者の「勉強部屋がほしい」に始まり、義務教育を終えて、助成金が得られなくなってからの進学、進級にかかる費用が悩みの種だ。

共働き夫婦の場合、収入は月平均24.5万円。共働きに伴う子供の保育所の入所も、大きな経済的負担と感じている。子供の数は2～5人が最も多く、子供を抱えた片親及び未亡人の苦労は大きい。

また高校か専門学校か、あるいは就職かを迷う者も多い。相談員としては現実を見ることが要求され、学歴、能力を見ながら可能性があれば勇気づけ、そうでなければ現実にあった道をアドバイスする。このような相談に対しては家庭訪問の必要がどうしても生じ、即答、即決は難しい。

結婚について

比較的早婚が多いインドシナの人々に対し、まわりの日本人から「あまり若いうちに結婚するのは良くない」とアドバイスされることがあり、定住難民を不安がらせる。また離婚に伴う法的手続き、金銭問題に関する相談もある。（このほかにベトナムのボートピープルの場合、圧倒的に独身男性が多く、「結婚できない難民たち」の問題も出てきた）

医療について

健康保険にはほとんどの人が加入している。

医療知識の不足から、リウマチなども大病と感

じられ、あるいは悪いつきものがついたと考えたり、大した病気でもないのに自殺を考える者が出たりする。また、日本人ではあたり前のことになっているガン検診なども、あまり受けている人はいない。

住居について

会社近くの公団・公営住宅に住みたいという意識が強く、風呂がついているのは絶対条件だ。雇用促進住宅に入居するには就業先での就業証明が必要となる。会社が申し込み手続きをしてくれる場合はよいが、理解のない会社だと問題が生じる事がある。定住難民にとって日本の居住条件は、物理的よりも精神的にきついものがある。

定住難民の人々は一般的に日本の福祉システムの理解が十分ではない。特に生活保護を受ける手続きは複雑で、日本語も十分でないのでトラブルも多い。また、彼らの心情として、将来に負担を残すような経済的援助には不満を感じているという。

相談を受ける側として

これら様々に寄せられる相談事に対し、各組織はそれぞれのネットワークを使い、専門家の意見も得ながら対処している。難民認定、帰化問題に関しては、難民事業本部の相談室に専門家が専従していることもあり、即答できる体制を整えている。

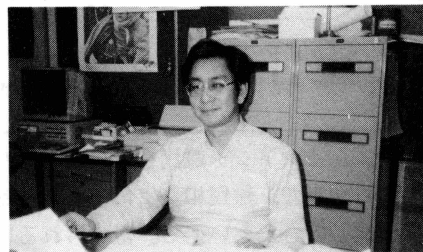
「問題によっては同じケースがいくつかの組織のネットワークに寄せられることもあり、こうした組織の横のつながりをこれからもっと促進させる必要がある」（CYR）。

「相談を受ける体制としても、日本の生活をよく理解した母国人があたる必要があり、この人材をいかにして確保し、またその人たちの横のつながりをどう日本人がサポートしていくかが重要な課題となっている」（CYR）。

「ブイ・ムン事件以後、家庭内でのめめ事に対しボランティア団体や定住センターが神経質になっていくことから、定住難民たちもピリピリしており、むしろ彼ら自身がびっくりしている。このためプライベートな問題に口を開きたがらなくなっている。相談を受ける側もどの程度まで外部から踏みこめるか、改めて難しい問いを受けている」（SVA）。

コーディネーター1年生として

定住難民プロジェクト・コーディネーター 山口 誠史



ボランティアからの電話にドキドキ

「もしもし、ボランティアのSですけど、私が家庭訪問に行っているカンボジア人の家の子供の、中学入学の件で聞きたいことがあるんですけど」。電話口から聞こえるSさんの声を聞きながら、「また私には分からないことに関する問い合わせではないだろうか?」と内心ドキドキしてしまいます。

私が、1987年4月から「定住難民プロジェクト」のコーディネーターを引き受けてから、電話がなるたびに感ずることです。何とも情けない話ではありますが、事実なので正直にお話します。

ボランティアの人たちは、週に一回の割合で定住者の家庭を訪問しながら、日本語を教えたり生活上の相談にのったりしているわけですが、彼らが直面する問題、すなわちそれは定住者が直面する問題なわけですが、非常に多様な領域にわたっています。就職の事、住居の事、子供の教育の事、近所付き合いや友達がいなかったといった悩みなど、それこそ数え上げたらきりがありません。電話で、活動報告書の中でまたミーティングの席上で、ボランティアの人たち1人ひとりが多くの問題に戸惑い悩んでいる様子がひしひしと感じられます。

ボランティアの多くは主婦や定年を迎えられた普通の人々です。きっかけは違いますが、誰もが定住難民の置かれている状況を知って、何か自分にもできることはないかとJVCに参加してきた人々です。難民の法的地位や日本国籍の取得方法、生活保護の申請の仕方や雇用促進住宅への入居方法など、はじめて経験することばかりです。ほとんどのボランティアは、日本語を外国人に教えることも初めてです。したがって、何か分からないことがあればJVCのコーディネーターに頼って来るのは当然です。

ところが、そのコーディネーターが頼りないのが問題です。質問や問い合わせに即答できず、「調べてあとでご連絡します」と答えるのが常です。ミーティングの席上でも、しばしば「頼りがいのないコーディネーターだ」と言われていました。

実際に私自身は、定期的に家庭訪問活動をした経験もなく、定住者の家を訪問した回数も数えるほどです。したがって、定住者の実状、何が問題でそれにはどのように対処したらいいのかが分かっていないのです。

そんな愚痴を言わずに、定住者の家をどんどん訪問すれば言いといわれるかも知れません。全くその通りなのですが、神奈川オフィスの仕事がメインで、定住難民プロジェクトはJVC神奈川の仕事の一部で他の仕事におわれてしまい、なかなか外へでて行けないのが現実です。

自立のための最低限の援助をする

このようなふがいないコーディネーターですが、相談にのったりミーティングで皆で考えたりするうちに、少しずつ定住者の抱える問題とその解決の糸口が見えてきたように思います。また、私自身のソマリアにおける活動の経験も、対象とする人々や彼らが現実抱えている問題は違いますが、基本的な考え方は同じであるという意味において、役にたっています。少々理念的すぎると言われるかも知れませんが、私が定住難民プロジェクトに関わる基本的な考え方は以下のとおりです。

JVCは、1つの固定的な組織ではなく「運動体」であると言えます。「運動体」というのは、JVCにとっての利益や組織の維持拡大が目的ではなく、活動者の自発的意志と責任において、地球上に発生している様々な問題の解消と、理想とする社会の実現のために一人ひとりが行動しているという意味です。

この目的のために、次の2つのことを注意する必要があります。第1に、岩崎代表がよく言うことですが、「JVCの活動の目的は、世界の人々と友達になること」です。それも、相手の人と直接対面して、全人格的につき合う中で、友人関係を創るということ。それは、一方的に自分が相手に対して何かしてあげるというのではなく、常に相互的な関係だと思っています。定住者と接する場合も、文化や考え方が異なる人から学ぶ姿勢が大切でしょう。

第2の注意点としては、「自助努力」と言うことです。実際に困難に直面している定住者に対して、日本人の手助けが必要な場合もありますが、その場合でも基本的な対応の方法が分かれば定住者自身で解決できることがあります。そのノウハウを伝えることにより、次回からは他人に頼らずに対応できるようになるでしょう。JVCの全てのプロジェクトに通ずることですが、「JVCは対象者の自立を促すための最低限の支援を行う」ということが基本です。

新しくボランティアになることを希望してオフィスに訪ねてきた人へのオリエンテーションでも、以上の点を最初にお話して、このような考え方に基本的に賛成していただける方に活動者となってもらっています。具体的なことがよく分かっていないくせに偉そうな事を言っているとされるかもしれませんが、プロジェクトに関わる人が単なる自己満足やかわいそうだといった気持ちだけで参加して欲しくありません。

知識や経験の蓄積が必要

先ほど、定住者の抱える問題点が少しずつ見えてきたと書きましたが、1つ2つ具体的に例を挙げて考えてみたいと思います。

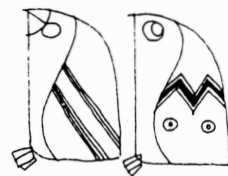
最も大きくかつ基本的なのは、日本語の問題です。日本語がよく分からないために、多くの定住者が職場でも学校でも日常生活でも苦労しています。仕事に関しても、結局日本語が不自由なために板金や塗装や組立てといった単純労働にしかつけないという定住者が多いようです。違った見方をすると、定住難民は日本人がなかなかつきたがらない中小企業の単純労働力供給源の一部になっているとも言えます。定住者の中には、故国で高い教育を受け社会的に高い地位についていたのに、やっとたどり着いた日本では言葉が不自由なため自分の知識や技術が生かせず、単純労働に甘んずるしかないという事がしばしばあります。中には、職場の同僚が話す日本語が分からず、自分の悪口を言っているんだと思い込んでノイローゼになった人もいます。定住者の方でも、あまり周囲の日本人と口をきかなくてもいいので単純労働を希望する人もいます。

このような例は、仕事の場に限らず枚挙に暇はありません。基本的には、本人の日本語学習努力にかかっているとも言えますが、一方で定住者を取り巻く日本人の方にも問題があるように思います。例えば、周囲の人が少し彼の話に耳を傾けたり話しかけ

てあげれば疎外感を感じずにいられます。また、大企業が門戸を開き、定住者の技術や能力を積極的に評価したら本人も日本語の能力を含めて伸びるはずですよ。

子供の教育の問題も1つには言語の壁がありますが、それも日本にきて間がない頃だけで、比較的短期間で普通の日本人の子供並にしゃべれるようになるようです。それよりも、難民キャンプでの長い生活などで基礎的な教育が受けられていないため、日本の学校の詰め込み学習についていけないという子供たちが多いのが問題です。学校に行っても面白くなく、同じように授業についていけないいわゆる落ちこぼれの子供たちの仲間に入って非行化してしまう子供も出てきました。学校側でも最初から匙を投げてしまい、とにかくところてん式に卒業させてしまうという例もあります。ボランティアの中にも、子供の勉強をみるのが活動の中心という人もいます。努力して中学や高校に受かった子供のことをうれしそうに報告してくれるボランティアの声を聞くのは楽しいものです。

ここにあげたのはほんの一例にすぎませんが、定住者は日常的にこのような問題を抱えており、ほんのひとにぎりのボランティアがそれを一緒に考え解決しようと努力しているのです。その努力を手助けするのがコーディネーターの役割なのですが、歴代のコーディネーターの経験や知識は今のところ充分に継承されているとは言えません。それは個々のボランティアの持っている経験、知識についても言えることで、せっかくの財産が個人のうちにとどまって広く生かされていません。経験に基づいたこの財産を活用すべく、アシスタントコーディネーターの落合氏を中心にボランティアが集まって、「活動事例集」(就職、教育、日本語教授といった分野別の問題整理と解決、失敗などの事例を集めた作文集)を作成中です。事例集自体は、問題解決のための参考になるだけで、実際には個別に対応しなければならぬことにかわりはありません。しかし、新任のコーディネーターにとっては虎の巻になりますし、定住者自身とボランティアにとっても有益なのではないでしょうか。何よりも私が一番欲しています。



“難民たち”との出会い——活動報告書より

難民引受記

穴水 令子

1977年ポートピープルとして国を出たベトナム人、M一家が下関の修道院に収容された頃は、日本ではまだ難民の受入体制は何もできていなかった。

先に難民としてフランスに定住している身内の者たちに、フランスに行きたいと手紙を出しても、一家を引取る者は誰もいない。理由は職がないからとの事。さりとてアメリカに定住の申請をすれば、フランスに身内のいる者を、アメリカには引取れないとの事。フランスに行けず、アメリカには受入れられず、日本にも居られず、彼らにはお先真暗な状態で1年余りを過した頃、私たちとの出逢いがあった。もし身元を引受ける者がいたら定住できるかもしれないとの事で一筋の光を見出した彼らは、私たちに運命を託したつもりだったと思う。1978年正式に定住が決定して彼らは喜んで北九州にやってきた。

当時私は、新日鉄の小さな子会社で経理担当の役員をしていた。世の中の人たちは皆新聞を読んでいるのだろうか疑問を持つほど、難民の話は出てこない。

犬養道子さんのファンである私は、その著書によってフランスやアメリカ等の難民への対応を知っていた。私は日本人である事が恥ずかしかった。自分の国と自分の事しか考えない心狭い日本人にはなりたくないし、クリスチャンである私の義狭心も許さない。誰もやらなきゃ私がやる。

早速行動に移した。いわば社長にけしかけたのかも知れない。ともあれ社長と相談して受入態勢を整え、手続きを終える。手続きに必要な書類9通、なんと面倒な事かと思う。仕事は樹脂の軸受メタル作成作業。住居は社宅としてマンションを借りる。家財道具は私が買入れ、足りない所は私の持物で間に合わせる。生活の一切は私が隣に住んで面倒を見る。言葉は幸い修道院での1年余り、シスターがかなり教え込んでいるし、フランス語ができるし英語が分る。子供の学校は教育委員会に申し出て、市立の小学校に入れる。

だが思いがけない事が次々に起こる。収容中の修

道院で、かなり甘やかされてきた彼らは着いたとたんに、オープンレンジがないと料理できないと言うし、子供にピアノを習わせたいと言う。奥さんのFは、今までやってきた刺しゅうのおけいこに下関まで通いたいと言う。また何とてか下関の刺しゅうグループの方たちが誘いに来る。電話をつけたところ、東京・下関等おかまいなしで電話代が心配で取外す。

友だちの所に遊びに行ったまま迷子になったBちゃんを暗くなるまで探して廻った事もあった。お腹が痛いところを廻るBちゃんを抱えて、お医者さんに駆け込んだ事もあった。たえず訪れるマスコミ関係者は、彼らの一番嫌うところであった。彼らの背後には、東京の留学生を主としてベトナム南北の暗黙の争いがあるようで、北関係の機関紙に彼らはひきょう者とか裏切り者とか書かれているといわれ、写真を撮られるのを極端に恐れていた。写真を撮る、撮らせないで、しまいいには私がマスコミを連れてきたかのような誤解をして、嫌な顔をするようになった。

カトリックの教会に行き出した彼らは、神父がフランス語ができるのを幸い、私に対する不満を色々告げたらしい。神父が私と彼らとの間に介在してきた。私が何も頼んだ憶えがないのに、奥さんのFのパートを勝手に決めてしまった。彼らの身元引受人という事は、非常に責任の重い事であった。警察の外事課より度々の調査もあった。彼らの行動はみんな知っていて欲しいとの事であったが、私の知らない事がだんだんふえてきた。子供の学校、PTA関係の人たち、教会関係の人たち、パート先の人たちに常に珍らしがられる存在で、同情を引くらしく、人の出入りも多くなった。色んなものが持込まれているようで、彼らにしてみれば「日本人みんな親切」だけど私には、迷惑であった。

職場でのMも最初は工場長の影のように動き、「早く仕事憶えたい」と熱心なよく働く人であったけれど、慣れるに従って「キツイ」とか「イヤ」とかの言葉が多くなったと聞く。そんな事とニンニクの匂いを嫌う仲間たちが除々にいびりだして、かなりの嫌がらせをしたらしい。Mはおとなしい人なのでそんな工場での嫌な事は何も私に話さない。後で知った事である。

2年目のある夜、隣のM夫妻がきて、「ワタシタチ、アシタトウキョウユキマス」と言う。職場には何の断りもない。「何しに行くの？ どこに泊るの？ どうして前から言っておかないの？ お金はあるの？」、私もうろたえてしまったけれど、常識外の事で「ワタシタチジュウ」と言う。東京にMの甥がいる事は知っていたが、泊れるような所にいるかどうか？ 何故事前に相談しないのか？

とにかく彼らは東京に行った。寝る所がないので一晩中話をしていたと言う。トンボ帰りで帰ってきて、「トウキョウビックリネ」と言っていた。

それからどれくらいの日が経ったか忘れてしまったが、ある日また2人でやってきて、「ワタシタチフランスユキマス、イイデスカ」ときた。「遊びに行くの？ お金は？ 今仕事休んでもいいの？」またうろたえた。彼らは「ワタシタチフランステイジュウシマス。モウキップカッタ。アト、ニモツダケオクル。オカネシンパイナイ、ママ」なんてことだろうと思う。いつどこで誰が世話をしたのか手続完了。それぞれ洋服も新調して、行きたくないと泣き叫ぶ

Bちゃんの手を引いて発った。Bちゃんは全く日本の子とかわりなく慣れ切っていた。それ以上に礼儀正しさと美しい言葉を身につけた。「ママサンワタシタチイッショケンメイハタライテ、マタニッポンキマス、イイデスカ」の言葉を残して。

私たちは一体何をしたのだろう。ただ振り廻されて、神経使って、くたびれて。社長は早くから彼らに愛想つかしをしていた。彼らがフランスに発つ日、見送りに来なかった。

今年もまたフランスのM一家からのクリスマスカードと、手紙にそえてスナップ写真が届いた。Bちゃんがなんと大きくなった事か。胸が熱くなる。あれからもう10年。Bちゃんは17歳、大きくなる筈だ。マルセイユに落ち着いた彼らは、Bちゃんを音楽学校に入れ、時にはパリに、時にはローマにバカンスを楽しみながら働いている。彼らの生き方のうさに舌を巻く。様々な事があったけれど、私の事をいつまでもママと呼んでくれる彼らが可愛いくなつかしい。ママ、いつフランスにきますか？ と書いてある。

気長にやっていこう

鈴木洋子

週1回、ベトナム難民の家庭を訪ね、日本語の勉強(?)をはじめて、7カ月が過ぎました。この7カ月は文字どおり「出会い」の連続でした。ベトナム人社会との出会い、ベトナム料理との出会い、“難民”との出会い。

ベトナム人の場合、ボートで出国してきたなどの事情から、一家がそろっている例はきわめてまれのように、特に、一家にデンと“お母さん”が存在しているのは、とても貴重なことなのです。そのせいかこの一家(りっぱなお母さんがいる)には、いつもたくさんの人たちが集まっていて、毎回、訪ねていくたびに、“初めてみる顔”に会うといったあり様でした。やっと最近、だいたいの人たちの顔を覚えましたが…。それはほとんどが子供たちの友人たちですが、中にはお父さんと同じボートで出国してきた人とか、日本に住む子供を訪ねて、アメリカからやってきた老夫婦などもいて、それぞれがすごい体験を持っていて、それなのに、サラット、淡々と

生活していて、私は、一種の迫力のようなものを感じています。

7月のある日のことでした。いつものように「こんばんわ」とドアを開けると、いつもの倍くらいの靴の山。(いつも靴の山なのですが)何ごとかと思っていると、お父さんが出てきて、「今日は娘の誕生日です」とのこと。HAPPY BIRTHDAY・G・19歳とかかれたケーキをまん中に、たくさんのごちそうがならび、20人以上の友人たちが集まって大宴会でした。私も何となくまぎれこんで参加してしまい、隣にすわった末っ子のK君に、あれは誰、これは誰、と教えてもらいながら、皆のベトナムの歌にあわせて手拍子をとったり、ギターをひいたり、食べたり、飲んだり…。

そんなこんなで、毎週何かしら新しい出会いのあるこの訪問は、私には本当に得がたい、貴重なものを与えてくれています。いつも帰宅すると、夫相手にその日の出来事をしゃべりまくるのですが、その度に、「どっちがボランティアなのかかわからないな」と夫に言われています。確かに、彼らを必要としているのは私の方で、彼らが本当に私を必要としているのかどうかは疑問なのですが、まあ、いいじゃないか、いつか役に立つこともあるだろうし、気長に友達づき合いを続けよう、と思っています。

日本は住みにくいけれど

あるボートピープルとして故国を脱出した青年に話を聞いています。

自由を求めて、半分あるかないかの確率にかけてこれから船出します。ここで別れると二度と会えないかもしれない母との別れ、自分の生の確率も50パーセントでしょう。泣き顔を母への最後の印象にしないために、精一杯笑ってみせます……。

* * *

これは2号まへのT/Eに載った、ベトナムからきた難民の青年に母と慕われている生方（なめかた）さんが、最初に会ったときに聞いた話のハイライト部分です。

何度か話した祖国からの脱出行……、その話に対して生方さんが見せた反応、それが彼の日本人観を変えたといえます。

日本には誰も住みたがらない

彼の名は、ファミ・トゥルン・トゥエン、4年前に大学時代の友人4人と脱出用の船を作り、国をあとにしました。長さ14メートルの船に105人の脱出希望者を乗せ、夜中の9時に、ホーチミン（サイゴン）から川を降りをはじめました。

しばらく行ったところで、警察に見つかり船で追いかけられます。むこうの船からはM79でしょうか大きな砲弾が発射されます。一発でも命中すれば命はありません。

しかし幸いにも砲弾はずれ、船は大海に乗り出しました。インドネシアかマレーシアにあると聞いていた難民キャンプをめざして、船は大海を漂流します。そして3日後、日本籍の船に出会い救助されます。

ちょうど大村のキャンプが満員とかでフィリピンに上陸しました。マニラに10日いたあとパラワンのキャンプに収容されます。そこに3カ月いて、アメリカ入国が決まった10人以外は日本に向かいました。

日本に来た95人のうち20人ほどは、もうアメリカなど第三国に向かいました。その中には、脱出と一緒に計画した友人も2人含まれています。残ったものも大半がアメリカ、カナダ、オーストラリアなどに移りたいと思っています。

「日本に住むのは大変です」

とトゥエンさんは何度もいいます。その理由としては大きく分けると4つのことがあるようです。

まず、日本語が難しいこと、といえます。5～6年住んでも満足に話せない人も多いとか……。なぜ難しいのかというと、短い語幹（たとえば、行くの『い』）に活用語尾だとか、助動詞だとか助詞だとか、たくさんのが付くからだそうです。

「日本人、冷たい。心が狭い」

その次は日本の住みにくさです。たとえばアメリカには難民に対する奨学金制度があります。金額は270ドルですが、大学には無条件で入れます。アメリカでのアルバイトの相場は約5ドルで日本と変わりません。しかし、アメリカでは5ドルあれば、1日暮らせるのです。日本では食費や家賃が高くて、もし大学に行っても生活に追われることになるでしょう。また日本では日本人とは給料が違いすぎるともいいます。

つぎに、アメリカには100万を超すベトナム人がいることがあります。それらの人が固まって住んでいるので、ベトナム語を話し、ベトナムの習慣どおりに生活することができそうです。そういえば、私がトゥエンさんにあったのは旧正月の日でした。テト休戦という言葉があったように、旧正月は最大の祭日です。

「日本にいると皆忙しいから、電話でオメデトウというだけね」

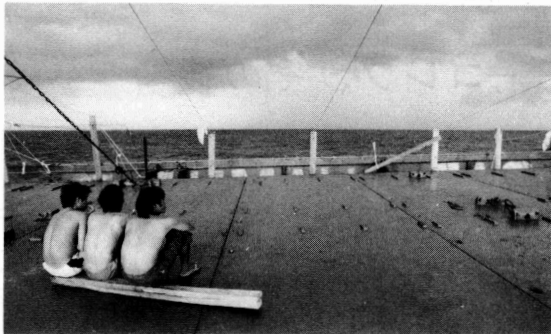
と淋しそうでした。アメリカでは爆竹を破裂させベトナム料理を食べて祝っているはずだというのです。

「日本人、冷たい。心が狭い」

とトゥエンさんはいいます。これが第4の、そして最大の理由です。

暮らしていくうえでいちばん困るのは、難民だというだけで、うちを貸してもらえないことだそうです。

「たとえば、ぼくの友だちの夫婦、いろんな不動産屋に行ったけど駄目でした。アメリカやカナダやオーストラリアでは、こんなことないです。お金さ



えあれば貸してもらえます」

これに代表されるような、いわれのない偏見を感じる事が少なくないそうです。会社の同僚と偏見が原因でいさかきが起ると、本当に悲しくなるそうです。

こんなにも、住みにくい日本なのに、彼らはなぜ住みつづけるのでしょうか？ そのもっとも大きな理由は、一度日本に入国が認められた人は、さまざまな特典を認められた難民としては、アメリカなどに入国できないからです。

生方さんは他の日本人とここが違った

このように住みにくい日本と冷たい日本人に会って、絶望しかかっていたトゥエンさんの心を暖めた生方さんの態度はどんなものだったのでしょうか？

ごく、簡単なことでした。

生方さんは彼の脱出行を聞いて、涙をこぼし始めたのです。それだけで心が通じたのです。それだけで、日本人のなかにも暖かい人がいるとトゥエンさんは思い始めたのです。

ここから、私事になります。トゥエンさんへのインタビューも定例どおり、いつ、どうして日本にきたの、脱出の方法は、といったかんじで始まりました。まず周囲の状況を聞き、それから話の核心（生方さんの印象）に入るというわけです。

つまり、生方さんがトゥエンさんに涙をこぼしたという話になったときには、脱出の話はすでに聞いていたのです。

私はそのとき、人間的な反応を示したでしょうか、正直なところ自信はありませんでした。言い訳はいくらでもあります。感情的になってはいいいインタビューはできない、彼の場合は幸運なほうでもっと悲惨な例もたくさん知っている……。

でもたぶん、これは単なる言い訳にすぎないでしょう。

あなたは他人のために涙を流していますか？

時は流れ過ぎて 大人になって

涙流しながら 泣けなくなった

(中島みゆき 『5歳の頃』)

という歌があります。年がわかるような古い歌ですが。

もう10年も前のこの歌にあるように、私たち日本人は、事実を感動したり泣いたりしなくなったのではないのでしょうか？ 映画、テレビなど、これでもか、これでもかと涙を強要する濃い味付けになれば、淡々と語る人の内面を思いやって涙することを忘れたのではないのでしょうか？ あなたは自信がありますか？

恥ずかしい自分の話が続きました。トゥエンさんインタビューに戻ります。

トゥエンさんが日本の良さも認めていることに触れないと、不公平でしょう。

トゥエンさんはインタビューの途中でときどき漢字の熟語をキーワードとして使います。ときには日本語にはない表現もです。というのは、19世紀まで漢字でベトナム語を表記していたからです（現在はアルファベットです）日本の音と訓のように中国語をベトナム語のなかに取り入れて使っていたようです。

文字を使うくらいですから、中国の思想も入っています。インド、ヒンズー圏の影響が強いタイなどとは違い、大きく分ければ日本と同じ中国の文化圏です。その文化とは儒教文化といってもいいでしょう。ですからトゥエンさんは欧米よりも日本の『文化』や習慣に対して共感を感じることがあるそうです。特に、家族を大事にすることや、治安がいいところなどです。

現在、トゥエンさんは日本に永住することを考えています。トゥエンさんの才能と努力と幸運のおかげでそれなりの仕事に付いていることも、その理由のひとつです。しかしもっと大きい理由は、可愛い女性との出会いでしょう。トゥエンさんの部屋には和服を着たその女性の大きな写真が飾ってありました。異国にきて、その国の異性に受け入れられるのは、心強いものでしょう。日本における差別の問題も結局のところ、就職と結婚の差別ですから。

(A・G)

誰もいない村——コレブ、その後

看護婦 有本敦子

いざ出陣

JVC東京事務所から、「コレブのその後の様子を見てくるように」と指令(?)が来ました。帰国前なのに「エーッ、ヤダア」と思いました。というのも、以前、低地に行った時、心臓が口から出てしまうほどシンドかったので、あの時の事が脳裏をかすめたのです。「でも仕方ない、これも仕事だ!!」

いよいよ、当日。水、寝袋、薬、食糧等を持ち、いざ出陣。そんな気持ちで車に乗りこみました。でもウッシッシ、こんな時は「女で良かった」とつくづく思います。JVCでコレブにまで行ける車は、今はたった1台のしかありません。座席は3人のみ。その他は荷台に乗ります。その日は6人が荷台に乗り、ここからこぼれ落ちないように、道中しかみついていかなければなりません。

マーシャから2時間弱、デブラゼートという村に入る手前で、大勢の人が働いていました。何をしているのかと聞くと、溜池を作っているとのことでした。「エーッ、こんな所に!」と私たちはこの池が役に立つのか疑問をもちながら、無料奉仕で働かされている農民に御苦労さんですと心で言って、コレブに向かいました。

テーブル台地の先端にコレブ地区の中心があり、私たちはそこの小学校の二室を借りました。下はコンクリートで少々硬いけれど、農家に泊めてもらいノミの集中攻撃を受けるより、ずっと楽でした。そして翌日、農民が自分たちが作った道を車で走ってみろと言うので、恐る、恐る、おりていきました。ヘアピンカーブどころのカーブではなく、何度も切り返さなければならず、30分行って車を止めました。

今回の目的は、JVCが配った小麦で、農民の生活はどうなったかを見るためだったので、行けるだけ遠くへ行こうということにしました。JVCが配給した小麦の代償に、農民が作った道でしたが、農業普及員という役人の命令で道幅を広くさせられたため大変な仕事になったようです。雨期になったら流されてしまうのでは…と不安を覚えながら進みました。途中、脱穀をしている一家に会い、今年の収穫はや

はり悪いという話を聞きました。その後、羊を追っている子供に出会い、話を聞こうとしましたが、おびえるような様子で、笑顔もなく、外国人に慣れていないのでしょう。7～8歳かなと思ったら、なんと14歳ということでした。でも、簡単には信用できません。というのも、カレンダーがあるわけでもないし、子供の年をはっきり覚えている親はあまりいないのです。それにしても、やせているし、回虫でもいるようなお腹をしていました。

誰もいない村

日本でやっていた登山とは逆に、ここでは最初の下って行き、帰りが昇りということになります。かなりの速度で下った2時間半に、出会ったのは、この2組だけでした。どこまで行っても、石がゴロゴロした畑と緑のない山と、水のない川が赤茶色の景色にずっと続いているだけです。水のある川まで、あと4時間!! 行けるかもしれませんがきっと戻って来なくなるでしょう。

こらで家を訪ねようということになりましたが、あたりは家も見えず、そのまま、また進んで行くと、ありました。小さな山のてっぺんに。「エーッあの上!!」仕方ありません。仕事、仕事。やっとやっと昇りついたら、なんと家人は1人もいないのです。少し離れた傾面の部落にも人が居る様子がありません。ただ、ただガックリ…。しばらくすると、遠くから人がやって来ました。

「誰もいないけれど皆どこへ行ったの?」

「家畜を追って遠くに行っている。近くにエサがない」

「今は何を食べてるの?」

「JVCからもらった小麦」

「その他は?」

「何もない」本当かなあ??

「川の向こうにはもっといい土地があるでしょ?」

「ある」

「何故むこうに行かないの?」

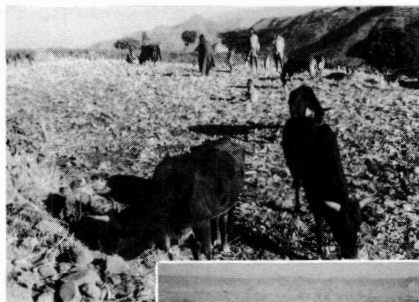
「行ったやつもいる。俺は、行きたくない。ここは自

分の生まれた所だから。それに、年寄りや子供を連れていくのは大変だよ」

もう1人の農民は「あっちに行くと、むこうの人間とケンカになるし」と言っていました。「ここだって今年は悪いけれど、いい年もある」と言います。素人の私がみた限り、けっして、肥沃な土地ではないけれど、農民にとって、自分の土地をそう簡単に捨てられるはずありません。それにしてもひどい所だ。

先生の御招待

ある程度話が聞けたので、帰ろうとすると、識字学校の先生が家に招待してくれるというのです。家はすぐそこだし是非にと…。エチオピアでは、人を招待するのがある意味では礼儀で、それを受けるのも礼儀のような所があり、行くことにしました。ところが近いはずの家がなかなか見えません。“しまった”と思った時には遅すぎたのです。また、ゼーゼーしながら家に着いた時は、すっかり疲れていました。何やかんやと、もてなしていただいてから、さあ、夕方までに車を置いて来た所まで戻らなければなりません。今から昇りになるのです。それから、やはり来る前の予感通り、ひどい事になりました。過換気症候群のような状態で、いくら休んでも呼吸は遅くならず、紙袋の中で息をしてみたり。



▲ 干ばつで牛もやせている



◀ グランドキャニオンのようなエチオピアの台地。右が有本さん

でも、私が行った所よりもっと奥からマーシャまで、小麦を取りに来る人が大勢いるのです。それも、小麦の入った袋をかついで。慣れているとはいえ、大変だとつくづく思いました。本当に食べ物に困りだしているんだと思います。

そして、やっと車にたどりついた時には、半分死んだ状態でしたが、これでやれやれ。ところが、今度は車が来た坂道を昇れなくなり、大勢の人の助けで、引っ張りあげ、押し上げてもらい、やっと高地にたどり着き、本日の任務終了。バンザイ。ちなみにコレブ高地は2500m、低地は1500とも1800mとも。だからしんどかったのは年のせいだけではないのです。

マーシャ村の教育活動

さて、マーシャ村周辺の教育活動について報告します。“母親学校”で活発だった10人を選び、そのお母さんたちが中心になれるよう、家庭訪問・識字学校・小学校・クリニックという場を借りて、もう一度勉強のしなおしと、教え方を学んでもらっています。また、農業学校で優秀だった2人のお兄さんを交えて、家庭訪問もしています。

昨年半年間は、教える側(JVCスタッフ)も、学ぶ側(お母さん、お父さん)も、とにかく、それぞれの義務を果たしたという感じでした。そんななかから、少しずつ、自分が出せるようになったお母さん、上手に野菜をきざむお父さんが出てきてとてもステキな場面です。今年は、それぞれが自分の活動に意見がもてるようになれたらいいなあ、と思います。

では、マーシャでのある出来事。

ある日、男の人が、「子供の具合が悪い」とJVCにきました。双子のうち1人は昨日死に、もう1人を助けたいと。さっそく、エチオピア人スタッフと

優秀お母さん1人と3人で、その村へ行くと、奥さんは、家の外で働いているのです。オヤッ!! 私たちが家の中に入った時には、ベッドに横になって赤ちゃんを抱いていました。ベッドにマットがない、お乳が出ない、服がないと、さっそく“何んにもないない、くれくれ運動”が始まりました。どれどれ、子供はどうか。健康優良児。おっぱいをつまんでみると、これまた優秀。“だまされちゃったネ、エシヤトー”と目で合図。あまりのミエミエのうそに、おかしくなりました。それなのに、まだうそをつくののです。「これの夫は死んだ、俺は弟だ。姉は困っている」と。この人たちは必至なのです。

後でわかった事は、JVCが各村に時々あげる仕事のメンバーに入れないので、直接、JVCから仕事をもらいに来たのです。なぜこの人は村長からメンバーとして選んでもらえないかというと、村長の嫌われ者なのです。“村長の身内か袖の下をさし出した者”は選ばれるのに、この男性は袖の下を出さなかったというのです。こんな話はよく聞きます。どこかの国とそっくりではありませんか!!

あるショッピング・コンセプト

小池清治

T/E75号の『ピースポート、カンパチアに行く』の中にちょっと気になる部分があった。もしよろしければ私見を述べさせていただきたい。

気になったのは市場で買物をする場面である。『豊かな国から来た日本人が貧しいカンブチアの市場で値切ってはいけない』と注意してまわる参加者がいたが、奢り高ぶる気持ちの裏返しでしかないこの意見に、耳を貸す人もいなかった」とある。この意見のどこが奢り高ぶる気持ちの裏返しなのだろう。持てる者が持たざる者にほどしをするのは仏教思想では当然のことではないか。

人のことをとやかく言うのはあまり好きではないので、私の体験を話そう。

場所はバンコクのクロントイ市場。ある露店で私はミュージックテープを買おうとしていた。買いたいテープが2本あった。値段を聞くと、一方が45パーツ、もう一方が50パーツだとその店の男は言った。定価は70パーツと75パーツである（デパートだと本当にこの定価で売っている）私は2本買うから両方合わせて90パーツにできないかと値切った。すると男はポケットから数枚の紙片をとり出し、それを私に見せながらしゃべり始めた。

「これはこのテープを仕入れた時の領収書だ。こっち（売値45パーツのテープ）が40パーツで、こっち（50パーツのテープ）が47パーツ。もうぎりぎりの値段で、これ以上安くすると俺は喰っていけない」。

そう真剣に訴える彼に私は返す言葉がなかった。結局95パーツで2本のテープを買ったのだが、それでも彼の得た利益はわずかに8パーツ（日本円にして約40円）でしかないのだ。この私ときたら、非情にもそのうちの5パーツを値切ろうとしていたのである。私はこの時から値切ることをあまりしなくなった。「本当のテープの仕入値はもっと安く、お前はうまくだまされたのさ」そういう人もいるかもしれない。だが私は彼を信じているし、私にとって2

本で95パーツ（約500円）という買物は十分に満足すべきものだった。

ところでヒースポートの諸君はいったいいくら値切ったのだろう。そしてその金額は諸君にとってどうしても値切らなくてはならない金額だったのだろうか？『値切り交渉だって立派なコミュニケーションの一部』だ。それはそれで認める。だからといってそれをしなけりゃコミュニケーションがはかれないということにはならない。もっとベターなコミュニケーションだってあるんじゃないのか。

もし、諸君がアメリカやヨーロッパ旅行でもショッピングの時は必ず値切り、日本にいるときも西武や三越で必ず値引きを要求するような人たちであれば、私はとやかく言うつもりはない。けれどもそういう人でないとすれば、諸君があゝの市場で買物をした時、「こういう国の人たちは日本人とみると必ずふっかけてくるんだから買ったたかなければ損だ」といような先入観がなかったらどうか？そして、それはかつて日本を『フジヤマ・チョンマゲ・ゲイシャガール』と見ていた西欧の見方と同類だとは言えないだろうか？

私は「絶対に値切ってはいけない」などと言うつもりはない。それが明らかに不当な価格であれば、当然ながら正当な価格を要求すべきだと思う。だが、値切りの金額を競い合い、より多く値切った者を英雄のように扱うのはどうかやめてほしい。自分が納得して買ったのなら、その品物はそれだけの価値があると思えばそれで良いではないか。鰯の頭も信心から、である。

以上、自責の念にかられながら…。



富安光子さん



「マコ」

「タボ」

JVCのオフィスに、時折耳慣れない名前がとびかうことがある。「マコ」は星野事務局長、「タボ」は富安光子さん。ともに都立竹早高校の卒業生で、〇十年來の友人である。星野さんはその当時より活発で、武勇伝にはいとまがなく（これらについてはいずれ機会があったら御紹介したい）、クラスでも人気者であった。現在でも30余人の方がマコファンクラブ及びJVC会員である。

その「マコ」を慕って富安さんがJVCを訪れたのは今から4年前のことだ。息子さんが大学に入り、自分の時間が少し取れるようになったので、思いきって阿佐谷のオフィスにやってきた。最初はおそうじおばさんだったという。「とにかくマコのやっているJVCに関われるのがうれしくて」と、富安さんは当時をふり返る。週に2日は横浜から2時間の道のりをかけて必ずやってきた。それこそ、雨の日も風の日でもある。JVCでは何度掃除当番を決めてもきちんと守られないので、必然的に掃除をやらざるを得なかった。そして宛名書きやら、振込票のはんこ押しなどけっこう忙しかった。初めは何をしているのかまごつくこともあったという。「仕事は自分で捜して下さい」というスタッフの冷たい言葉にもめげず、せっせと通った。

そんな富安さんを家族の方たちは「もの好き」と見ていたらしい。今もその評価はあまり変わってい

ないが、「最近はおきりめたみたいよ、何もいなくなつたから」とのこと。それでも御主人は新聞にJVCの記事が載ると切り抜いてくれたり、チャリティー・ウォークに参加するなど、少しずつ理解を示している。

現在の富安さんの出勤日は月・水・金。募金担当になったのは1984年11月から。それ以来ずっとお礼状を書き続けている。

「この方には以前これを送ったから、今回はこれにしよう」とか、「新聞記事を見て送金して下さったのだから、新聞の切り抜きを送ってもしようがないわね」とか、きめ細やかな気配りはさすが人生のベテランというところだ。本誌の読者の方の中にも富安さんからのお礼状を受け取った方は多いと思う。そんな富安さんでも時には失敗もする。お香典を募金として送っていただいた方に、お礼状といっしょに機械的に振込票を同封してしまい、「また要求するの」と叱られてしまったり、金額をひとけた間違えてしまったりなどなど……。

JVCには自己財源が少なく、国連からの委託金や、新聞社や宗教団体からの寄付が主な活動費になっている。したがって収入も不安定になりがちだ。1985年のエチオピア飢餓キャンペーンでピークに達した収入も、それ以来下降線をたどっている。85年は新聞社からの寄付が大きかったためである。ところが、JVCに直接寄せられた募金はその当時よりもずっと増えている。それは新聞社自体があまり大きなキャンペーンをやらなくなったためかもしれないし、JVC自体がいろいろなところでとり上げられてきたせいかもしれない。

また今年から犬養道子さんが、JVC内に「犬養道子、「みどり一本」」募金を設け、エチオピアのプロジェクトを支援するようになった。今まで富安さん1人でこなしてきた募金処理が大変になってきた。「募金を下さる方々に1日も早いいいねいなお礼をと気ばかりあせて、一向に行き届かないことをいつも心苦しく思っています」とは富安さんの弁。週に1、2回お手伝いして下さる方を希望している。

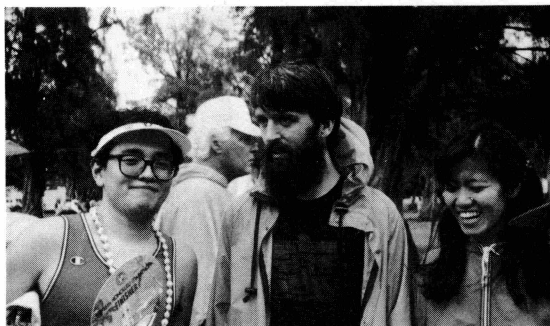
〔追記〕 この原稿を書き終えたあと、「私は募金係ばかりじゃないのよ」といわれてしまった。感謝状、イベントの看板など毛筆を使うところは、書道4段の富安さんの腕に頼っている。お茶やトイレトペーパーの気配りなど「お母さん」は大忙しなのだ。

JVCNEWS

ホノルルで チャリティマラソン

昨年のホノルルマラソンに参加し、JVCに募金した青年がいる。その青年とは山田周さん。何回かチャリティ・サイクリングをしておなじみのジュリアン・パンフォードさんの教え子である。はじめはジュリアンさんの行動力に感動しているだけだったが、ぜひ自分も見ているよりやってみないと、ジュリアンさんの勧めもあってフルマラソンに挑戦した。

12月13日の当日は雨、歴史的な暴風雨となった。1万人の参加者の内4500人が日本人だった。ひどい雨で山田さんの記録は6時間20分1秒であったが、42.195kmを完走した喜びは大きく、またフルマラソンに参加したいという。なお募金の方法はチャリティ・ウォークと同じで、1kmにつきいくらで友人



たちにスポンサーになってもらい、4万円を集めた。これまで山田さんはJVCの主催した山の手ウォーク、グリーン・ウォーク(ガイドとして参加)、かながわチャリティ・ウォークにも参加している。

3月13日は熱海で行われる「湯らっくすマラソン」(12km)で走るつもりだ。またがんばって下さい。

エチオピア緊急医療報告

『JVC アジバール病院』

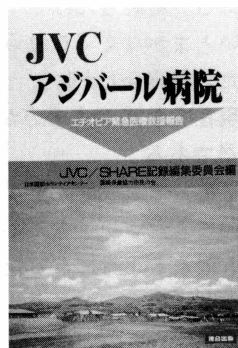
連合出版 1500円

JVCの活動記録が初めて本になった。執筆者はJVC/SHARE記録編集委員会の医師や看護婦、それにコーディネーターの9人である。

あの1年間は何だったのか、何をしたのか、活動を振り返る。どの章にもエチオピアの人々とともにこの困難を乗り切ろうとする日本人スタッフの息づかいを感じることができる。

周期的に襲ってくるエチオピアの干ばつ。とりわけ1984年の被害はひどく、世界中から寄せられる救援物資に群がるやせ衰えた人々の姿を思い出す。JVCは1982年から行ってきたタイ・カンブチア国境での医療活動の経験を生かし、1983年にJVCから生まれた医療グループのSHAREとともに初めての本格的な緊急医療を開始した。物資の調達、くるくる変わる政府担当者との交渉、そして何より激務による過労など初めて経験することも多かった。

JVCは設立されて9年目を迎えたが、日々の忙しさに流され、まとまった記録がない。これまで多く



のボランティアが活動に参加し、去っていった。医師の本田さんは「私たちの共有した体験を貸借対照表のようにきちんと記録しておかなければ、非政府組織(NGO)をめざす者の仕事は、さいの河原の石積みのようにいつも一からのやり直しで、同輩や後輩に伝えるメッセージを何も残せないことにもなろう」と述べている。仕事を持ちながら本を書き上げるのはなかなか容易ではない。この本は本田さんたちの使命感によってできたともいえる。JVCの貴重な財産が生まれた。

(JVCでは1200円(送料別)でこの本を取扱っています。どうぞお申し込み下さい)

JVCプロジェクト

1988年2月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 加藤志保, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, 柴田久史 アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外、事業計画、情報収集、資金調達等を行う。 神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画、運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション JVC説明会—毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時 昨年行われた「チャリティ・ウォーク」を今年も実施するための準備が始まった。正式な実行委員会は4月に発足予定であるが、10月、横浜での開催を目指して準備作業を行っている。		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト 1月31日、アジア市民フォーラムの定住難民分科会に向けて準備作業を進めてきた。JVC, SVA, CYRが中心となって、東京、神奈川の定住難民に関わる団体、市民グループのミーティングを開いた。当日は14団体から30人以上の方が参加し、互いの活動紹介をしたり、現在抱えている問題を出し合った。 2月13日、神奈川オフィスで全体ミーティングを行った。今回は参加者が20人近くあり、年度末パーティ、事例集作りなどを中心に活発な意見が出た。ミーティングに引き続き機関誌の編集会議があり、『もしもしあのね』第5号について話し合った。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 横浜キワニスクラブ、全国老人クラブ連合会、国際交流ホスピタリティ・トラスト、禅林寺龍華会基金、「チャリティ・ウォークかながわ」	山口誠史, 落合正幸, 谷本栄子, 他約60人
	●東金農場 東金農場の今後の発展について、地元の支援者とJVC代表等の話し合いが続けられている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助 他団体に先がけて87年8月より開始したfood for workにより、現在のところ飢餓の予防に成功している。しかし次の収穫期まで1年間村人の生命を守るため、約65万人を対象とした食糧配給を続けざるを得ない。食糧、輸送力、倉庫の確保を急いでいる。 ●総合的復興促進 1. 植林 農民、母親、子供を対象に指導、その後家庭植林用に苗木を配布。土壌・水源保全用に植え付けを終えた。 2. 保健、栄養 家庭菜園、離乳食の訪問形式による奨励が母親自身の手で行われつつある。地元診療所とともに母子健康相談も実施している。 3. 給水 清潔な飲料水確保のため、泉の保護をしている。種子銀行、農業教室も引き続き行っている。	CRDA, 西本願寺、チャリティ・サイクル、メリノール修道士会、全国老人クラブ連合会、バンド・エイド、東京グリーン・ウォーク、ジャパン・タイムス、モラロジーMIRC, Tree for life of the, 栄光学園、「チャリティ・ウォークかながわ」、日本少林寺拳法連盟	加納 妙, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, 山田 盛 イエットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 JVC が一番初めに手掛けた農場 Unit 1はその農民の多くが農業経験に欠け、農場建設の際に土地を荒らしたことで、年々土がやせてきた。この改善のために、現在休耕し、農場再編中である。また農場は176haになった。 ●現金収入 (インカム・ジェネレーティング) いずれも順調に進められている。 ●コミュニティー・サービス 焼き物コースで作られる品々を市場に売り始めた。売り上げの半分は彼らの手に、残り半分はJVCに入る。その他のコースも順調である。 ●植林/その他 マガネイ・キャンプの80%に植林し終えた。また、1年半前より実験的・教育的に始められた養鶏プログラムを現金収入プログラムに広げつつある。	UNHCR, 創価学会青年平和会議, 仏国土をつくろう会	金子一弘, モハメッド・アブディ, シアッド, 荻ノ迫善六, 船川秀夫, 中野周二, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ, ムハボ, アブドラーヒ
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	来たる4月の雨期に向け、キャンプ内植林のための苗木づくりが進んでいる。樹種はバパイヤ、インドセンダン、パーキンソニアが主である。1月中旬に3分の1ほどが枯れたが、さらに種をまいた。 個人より寄託された医療器材は、笹川平和財団の資金援助で(財)海事協力センターが運営する「国際平和輸送サービス事業」によって、ソマリア政府にあて無料で輸送された。	朝日新聞厚生文化事業団, 砂漠に種をまく人の会, R. I. ジャパン	シュクリ
カンブチア (ブノンペン カンダール県 プレイベン県 スバイリエン県)	1. サンタピエップ (平和) 技術学校, ワーク・ショップ。 1月12日より、技術学校の試みとしての機械工初心者向研修が3カ月のコースで開始された。タukkanとディエンが指導に当たり、58人ほどの訓練生が出席している。 2. 井戸掘り / 給水 (OXFAMと共同) TONE (井戸掘り機) →カンダール県 [87年度21本] ハイドロリック () →プレイベン県, スバイリエン県で続行中。[87年度51本] 農林省水利局はTOM-3を活用して給水活動を行うため、カンボット県でのかんばつ地域を調査中。4月以降、JVCのワークショップで2本、他にカンボット県38カ所で井戸掘りを行う予定。 3. ブレック・ピノウ孤児院援助 8月13日、男子寮の補修完成。雨漏りもなくなり非常に明るくなった。雨といも水タンクも完成し、あとはトンレサップ川からの給水と浄水システムを残すのみとなった。 4. RINE・プログラム (母子保健) 2月15日、ブノンペン郡 RINE センターの基本図面 (JVC 提案) が PMI (母子保健局), カンダール県保健局によって了承され、同時に基礎訓練を終えた12人の女性保健アシスタントの活動の場としての臨時のセンター (4m×10m) の建設が決定された。4月10日、SHARE の本田医師と釘村看護婦 (助産婦) がブノンペン入りし、母子保健活動および同スタッフ訓練を開始する。	関東青年会議所 平和基金 全国老人クラブ連合会, 創価学会青年平和会議, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILC チャリティグループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会 覚法寺, 「チャリティ・ワーク かながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, [カウンター・パート] タック・カン, アム・ディエン, メアス・サメット, ゲット・ソーン (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計総務, 情報収集および広報, バザー, 古本のセール。季刊『ニュース・レター』(英語・タイ語) 発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン, 石原淑子, 谷山博史, カモン・ミンムアン, スンニー・ティチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 キャンプ内の395人の若者たちが單車, 一気筒エンジン, 自動車などの理論と実技を学んでいる。 2月末から3月にかけて日本政府の面接調査が行われる。	UNHCR, SV (Stichting vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム 清水俊弘
国境のサイト2, ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食・栄養保健教育 妊産婦, 2歳以下の乳幼児を持つ母親を対象にドライパックを配給し, 栄養教育を行っている。 2月中旬にはスクーリングがあり, 登録が新たに行われた。結核患者, 栄養不良児やその母親, 託児所の子供たちには食事の配給も行われている。 国境での活動は今年の3月で終了する予定なので, その準備に入っている。	WEP/UNBRO	ブーム, ウィンナイ, , スピチャ, チューン, 前野博美,
パナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み, 書き, 聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。 1月27日, ナポーキャンプからラオス難民35人が到着。2月1日から勉強を始めた。	天理教千葉	フォード・順子, 鶴岡善和, 北代るり, アナン・ブダミリンブラ ティープ, ウィバ・ロンブリック
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 アソク地区で子供クラブを開く。 ●クロントイ図書館 本棚を作り, 図書の整理とチェックを行った。 ●移動図書 セナスラムで活動中。2月中に建設事業を始める。 ●農村開発 88年の計画について農民と話し合っている。 CCSD (Coordinating Committee for Slum Development) の活動に参加している。 2月18日, スラムで働いているNGOのミーティングが開かれた。 2月23日, 住宅公団とNGOがどのようにスラム開発を共同で行うか, 話し合いが持たれた。	モラロジーMIRC, JOFIC,	バティット・チャンスリヤオン スバチャイ・セーリー, サムルアイ・ジョンヨークラ ン, リーラ・クンナロン, コメン・スンサマラヤ
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, パラワン島)	・国際移民委員会(ICM) — 第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	石井弘代

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (2月小計 29,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (2月小計 39,000円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (2月小計 11,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (2月小計 161,600円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (2月小計 52,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. テッグ・スラム奨学金・基金 (2月小計 887,750円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (2月小計 23,000円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (2月小計 4,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (2月小計 38,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (2月小計 0円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (2月小計 304,000円)
- エチオピア緊急救援募金 (2月小計 2,832,198円)
- クロントイ・ナイ火災救援募金 (2月小計 65,000円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)

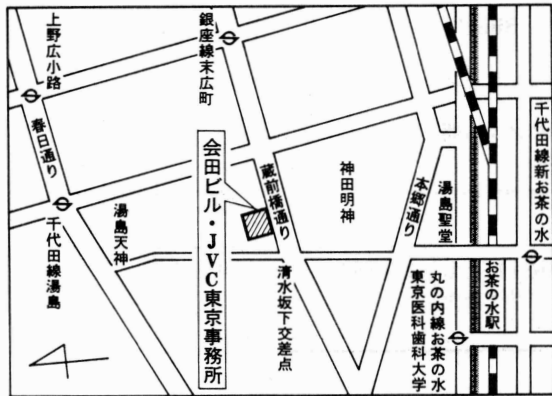
加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶定住難民に関連する、ニュースが2つ。

この4月から各センターで行われる日本語の訓練期間が、3カ月から4カ月になった。「たった1カ月なんて」という陰の声も聞かれるが、日本語を学べる期間が延びたのはちょっとよいニュースだ。

2つ目。『日本のくらし』という定住難民と難民としての保護を求めている外国人のための法律ガイドブックが、法律扶助協会から出版される。具体的な例をあげ、わかりやすく説明するという。まだ原稿を集めている段階だが、これができればボランティアの人々にとってもずいぶん助かることだろう。



犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (2月小計 490,946円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

昭和63年3月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎ 03(834)2388 FAX: 03(835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F 財神奈川国際交流協会内 ☎ 045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円